

たぐろ

TAKUSUI
No. 682

8

August, 2013

発行 財兵庫県水産振興基金

兵庫の漁業人のための情報誌



干しダコのある風景（明石市）：写真提供 JF兵庫漁連 津田英幸氏

平成26年度 農林水産施策の推進に係る政策提案会 開催

コープこうべと地産地消事業を推進

ジャンボフェリーで安全講習会

ようそろ

「ずっと真っ直ぐに」

(ようそろとは航海用語で「宜しく候の意。主に船を直進させるときのみ号として使われる。)

変わらぬ想い

JF兵庫漁連 専務理事 山口 徹夫



40年以上も前の話しになるが、私が最初に社会に出て職に就いたのは中東のクウェート。この国は小国ながら今でも石油埋蔵量の多さを誇っているが、当時、アラビア湾（一般的にはペルシャ湾）で操業するトロール漁船が存在しアジアカエビを漁獲し母船で凍結され日本などへ輸出していた。

おそらく資源枯渇の傾向が出はじめ、この国の政府からの要請で日本のある石油会社が石油採掘権の保全のためサービスとして、アジアカの種苗生産と放流を行うこととなり、この仕事を受けられた恩師が組んだチームに加えていただき3年間をアラブで過ごした。

この時、伊保の漁師さん2名もスタッフにおられ、採卵用の親エビを獲っていたのだが、この地方に伝わる伝統的な木船を漁船として、内海の小型底曳技術を使っていたのだが、今考えるとあんな船で良く漁ができたものだと思う。

リーダー役の恩師が言っていたことを思い出す。「漁業を行うには様々な知識が必要だ。まず、漁に出る前には天候のこと（気象学）を知らなければ、沖に出ても無駄になるだけではなく、生命にかかわることもある。次に、海洋学の事を知らなければ、つまり海底地形や海流のことを無視しては、思いどおりに釣り糸や網を入れることはできないし、水温や塩分濃度の変化に注意しておかなければ、どこに漁場が形成されるのかもわからない。最も大切なことは魚類の生態学である。例えば魚種によってどこで生まれ、何を食べ、どのように移動し、どのような場所を棲家に行っているのか。そして、水温や塩分濃度あるいは潮流とどんな関係があるのかを知らなければ魚にならない。」だから、漁をする人の事を特別な技術や知識を持つ教師や医師などと同じように、尊敬の意味で漁師と呼ばれている」と！

漁業を生業としている人々のことを最近「漁業者」と呼ぶことが多くなったが、個人的には「漁師」いや「漁師さん」の方が好きであるし、40年間変わらぬ想いである。

CONTENTS

No.682 August. 2013

- 2 ようそろ
- 3 平成26年度 農林水産施策の推進に係る政策提案会開催
- 4 海上安全講習会をジャンボフェリー内で開催
- 5 兵庫県JF職員研修会開催
- 6 コープこうべと地産地消を推進
- 7 気象庁からのお知らせ
- 8 坊勢島で小型底曳網漁業を体験
- 9 干しダコ出来たよ!!
- 10 大輪田塾だより
- 11 海難事故をなくそう!
- 12 グループリーダー-夏期研修会を開催
ヒトデの駆除に新兵器!?
- 13 兵庫JCC通信
- 14 旬に想う



表紙の言葉

「干しダコのある風景」(明石市)

写真撮影：JF兵庫漁連 津田英幸氏

様々な食べ方で愛される瀬戸内海のタコ。なかでも干しダコはその味、食感が根強い人気です。

停まっている自転車、積まれたコンテナ、防潮堤の上の植木鉢など……

物干し竿に吊るされた干しダコは、浜の風景に溶け込んで、夏を感じさせるものとなっています。

風情があって、どこことなくユーモラス。やはり、瀬戸内海の夏の浜には干しダコが似合います。

平成26年度農林水産施策の推進に係る

政策提案会開催

JF兵庫漁連

県の翌年度予算や重要施策に系統団体の意見を反映させるための、兵庫県主催「平成26年度農林水産施策の推進に係る政策提案会」が、7月16日（火）神戸市中央区の土地改良会館において開催されました。

この提案会は、水産業界から水産施策の提案を行う場として、農政環境部長はじめ県幹部出席のもと、毎年、県が開催しているものです。冒頭、挨拶に立った県農政環境部 伊藤 聡部長は「日本食を無形文化遺産に登録する動きがある。それには魚は欠かすことのできないものであり、本県漁業の大きな課題である燃油高騰や豊かな海を取り戻す運動に積極的に取り組みたい」と挨拶をされました。

これに対し、JFグループ兵庫水産政策協議会を代表してJF兵庫漁連 山田 隆義会長より「燃油問題では、本県、全国と大会を行ったが、政府与党から打ち出された施策は期待外れであった。漁業者の生活は困窮しており、今後も引き続き要望活動を行っていくが、是非、後方支援をお願いしたい。また、瀬戸内海再生に向けた議員連盟では、知事をお呼びして勉強会を開催したいと予定しているのでご協力をお

願いたい」と挨拶がありました。

引き続き、JF兵庫漁連 山口 徹夫専務より「県産水産物の消費拡大に係る食育の推進並びに地産地消の推進」、「漁業経営安定対策について」の2項目を重点的に提案し、これらのテーマを中心に、県幹部とJFグループ兵庫水産政策協議会委員による活発な意見交換がなされました。



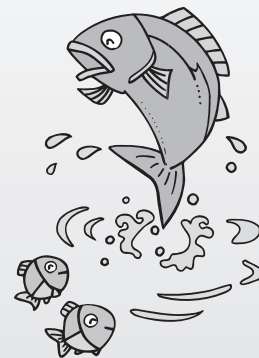
— 平成26年度 政策提案の内容 —

重点要望事項

1. 県産水産物の消費拡大に係る食育の推進並びに地産地消の推進
 - ① 兵庫のさかな食のモデル地域構築計画の円滑な推進を通じた、県産水産物の消費拡大と食育並びに地産地消の支援強化について
 - ② 但馬産水産物の流通販売促進への支援について
 - ③ 「兵庫のり」のブラジル等への輸出推進に係る支援について
 - ④ 移動販売車による鮮魚販売事業に対する支援について
2. 漁業経営安定対策について
 - ① 設備等の更新に対する支援策の構築について
 - ② 漁業共済掛金に対する助成について

<継続要望>

1. 漁業用燃油高騰対策として
 - ① 「漁業経営セーフティネット構築事業」を拡充強化すること
 - ② 漁業用燃油に係る税制措置として、漁業に使用する軽油に係る軽油引取税の免税措置の恒久化並びに農林漁業用A重油に係る石油石炭税の免税・還付措置を恒久化すること
2. 瀬戸内海関係漁連・漁協が行う、新法（新瀬戸内再生法）制定に向けた取組みへの支援
3. 日韓漁業問題について



その他の要望事項

1. 放置艇を收容する係留設備の整備並びに賠償責任保険の加入促進について

海上安全講習会をジャンボフェリー内で開催 ～大型船からの視界や動力性能を体験～

(財)兵庫県水産振興基金

7月10日(水)並びに同月23日(火)、系
統団体(ＪＦ兵庫漁連、共水連兵庫県事務所、
兵庫県内海漁船保険組合、ひょうご豊かな海
づくり協会、兵庫県水産振興基金)と国土交
通省神戸運輸監視部が主催した「海上安全講
習会(命を守る運動)」が大型船において開
催されました。これはジャンボフェリー(株)の
協力を得て実現したもので、同社の神戸発小
豆島経由高松行き船に乗り、船内で操舵室
(ブリッジ)の見学や意見交換を行うことで、
大型船から見た視点の違いや航海感覚、操船
の難しさを体験しました。



小豆島入港前のブリッジ内。緊張感があります(7月10日)

参加した漁業者・漁協職員らは、神
戸港出航後、すぐにブリッジに上がり
明石海峡を通過するまでの間、操船方
法やレーダーの画像などを間近に見る
ことが出来ました。フェリー担当者は
「大阪湾側から明石海峡に進入する場
合、レーダーは明石海峡大橋までは信
用できるが、橋の向こうは偽像となり
易く、安心できない。船長は安全な航
路を早めに選択する必要があるが、他
船においては避けきれずに停まった
り、Ｕターンすることもあるようだ」

と話され、実際のレーダーに小
型船が映ったり消えたりする状
況を目の当たりにし、海峡付近
はかなり注意深く航行されてい
ることが分かりました。過去に
海技大学の大型船シミュレー
ターを体験した方からは「シ
ミュレーターとは)また違った感覚。
漁船から見た場合に比べ、大型船から
は想像以上に小型船が接近してい
るに見える。前方や左右の死角に入れ
ば全く分からない」などといった感想
が聞かれました。

海峡通過後には、船内において意見
交換が行われました。フェリー側から
は「どのような漁具で、どのような漁
をしているのか。季節や時間も分か
れば助かる。海中でどの様に漁具が展開
されているかが分からないので教えていた
きたい。」等の意見が出されたほか、フェリー
の乗組員が香川県の漁船に体験乗船し、知識
向上に努めていることなどが紹介されまし
た。最後に双方から「お互いに海で仕事をす
る立場を理解し、協力しあって事故のないよ
うに努めたい」として終了しました。

事務局を務めるＪＦ兵庫漁連(指導部)に
よると「この取組みを今後数回に分けて行
います。少しでも多くの方に体験してもらい、
海上安全に繋がりたい」としております。次回



意見交換会の様子(7月10日)

は来年1月に予定されています。(お問合せ先はJF兵庫漁連指導部 TEL: 078-940-8013)



今回乗船した「りつりん2」
(総トン数: 3,664トン 全長: 約120m 型幅: 20m)



23日の研修の様子

兵庫県JF職員研修会 開催 「漁業権について学ぶ」

(財)兵庫県水産振興基金

(財)兵庫県水産振興基金は、7月29日(月)兵庫県水産会館において「平成25年度 兵庫県JF職員研修会」を開催し、会場がほぼ満員となるJF・系統団体職員など約70名が参加しました。

講演は「これからの漁業権」と題し、講師の県水産課 中岸 明彦課長補佐兼漁政係長から、漁業権制度の成り立ち、定義などの基礎知識とあわせ、権利の濫用・誤用事例などが紹介されました。まとめとして中岸氏は



講演を行った中岸講師

「漁業権を守るためには、漁業者は自ら漁業権免許権者・行使者としてその法的適格性・合理性を世間に知らせるべきではないか」との話をされ、参加者は漁業権について認識を新たにされたようです。

このあと、JF兵庫漁連指導部 北村 伸也主任から「漁業協同組合書式集(改定版)」について、続いて県水産課組合指導係 大石 賢哉主査から「漁協等向けの総合的な監督指針の制定について」の説明がされました。

今後、当基金では今回の研修会終了後に実施したアンケート結果を参考に、JFの健全な発展に資することを目的に内容を検討し、研修会を実施していきます。



県水産課 大石主査



JF兵庫漁連 北村主任

コープこうべと地産地消を推進 「コミュニケーションを通じて販売」

JF兵庫漁連 広報部

7月2日(火)、コープこうべとJF兵庫漁連(山田 隆義会長)が連携した「ひょうごの地魚推進プロジェクト」が始動しました。このプロジェクトは、コープこうべ54店舗で、新鮮な地魚を示す「とれぴち」シールをパツクに貼って販売するものです。なかでも大型店9店舗では、「産直市」として毎週火曜日に、JF兵庫漁連が派遣



した普及指導員が、コープ組合員とのコミュニケーションを図りながら、魚の美味しさや食べ方を提案するほか、コープこうべのスマートフォンを使った取り組み「Next pass (ネクストパス)」を活用した若年層へのアプローチの強化を図り、魚食文化の継承や「地産地消」の普及につなげるも



のなっています。

JF兵庫漁連では、これまで、旬の魚や食べ方などの情報発信の役割を果たしてきた街の魚屋の激減や、消費者の生活様式が大きく変っていくなか、水産物の食べ方や調理法に対する消費者の知識低下に危機感を抱き、本来の魚の美味しさや食べ方を伝える一般消費者への食育への取組みを重要視しています。そこで、このたびコープこうべと連携し、普及指導員による店頭での加工品も含めた「安心良質な兵庫県産魚介類」の試食、商品説明、調理方法等を提案しつつ、そのコミュニケーションのなかから、旬の魚の美味しさ



や食べ方を、直接組合員に伝え、地産地消を推進して行く取組となっています。

この日、産直市が実施された店舗は大型店9店舗。他の店舗でも同じタイミングで同じ魚種を販売しています。今後は、状況を見ながら実施地区を拡大していきます。

毎週火曜日産直市実施コープ店舗のご紹介(D:コープデイズ、C:コープ) シーア、D北町、D神戸西、C北口、C横尾、C西神南、C苦楽園、C武庫之荘、C甲東園

～気象庁からのお知らせ～

8月30日から『特別警報』の発表を開始します

気象庁は8月から特別警報の発表を開始します。

気象庁はこれまで、大雨や地震、津波、高潮などにより重大な災害の起こるおそれがある時に、警報を発表して警戒を呼びかけていました。より甚だしい大雨や大きな津波等が予想され、重大な災害による危険性が高まっていることをお知らせし、特別な警戒を呼び掛けるために、新たに「特別警報」を発表します。特別警報の対象とする現象は「東日本大震災」や、我が国の観測史上最高の潮位を記録し、犠牲者3,300人以上を出した「伊勢湾台風」の高潮、紀伊半島に甚大な被害をもたらし、死者・行方不明者合わせて98名を出した「平成23年台風第12号」の豪雨等が該当します。

津波、火山噴火については、それぞれ大津波警報、噴火警報（レベル4以上）など、既にある警報のうち、危険度が非常に高いレベルのものを特別警報として、従来の名称のまま発表する予定です。

特別警報が出た場合、お住まいの地域は数十年に一度しかないような非常に危険な状況にあります。津波（大津波警報）であれば、何より高いところへの避難が必要ですが、大雨や高潮などの風水害の場合は、避難のために外出することが既に危険となっている場合もあります。屋外の状況や、避難指示・勧告等に留意し、避難所へ避難するか、屋内の比較的安全な場所にとどまるかなど、ただちに命を守るための判断・行動をしてください。

また、特別警報が発表されないからといって災害が発生しないということではありません。従来の警報はこれまでと変わりなく、重大な災害のおそれがあるときに発表しますので、警報が発表された時点で十分な警戒が必要です。大雨等の際は、時間を追って発表される注意報、警報やその他の気象情報を活用して、早め早めの行動をとることがあなたや家族の命を守ります。

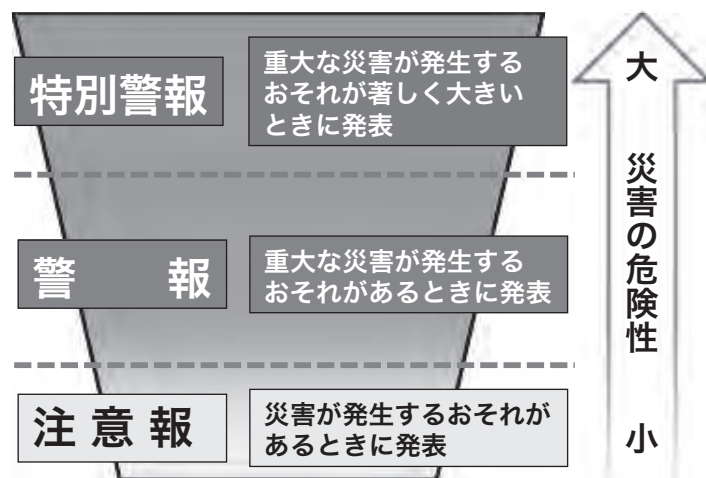
『特別警報』は、テレビやラジオ、防災無線などの様々な方法で伝えられます。『特別警報』が発表されたら、ただちに命を守るために判断・行動してください。

特別警報の詳細は、気象庁ホームページでご確認ください。

<http://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/tokubetsu-keiho/index.html>

お問い合わせ先

気象庁神戸海洋気象台業務課 078-222-8907（電話番号）



坊勢島で小型底曳網漁業を体験 「イオン集配センター」なども視察」

但馬地区漁協青壮年部連合会

但馬地区漁協青壮年部連合会（山中康正会長）は、漁協が行う資源管理の手法や、瀬戸内海側の漁業の現状、現在行っているイオン（株）との提携についての理解を深める目的で、姫路市で視察研修を行い、関係者もあわせ15名が参加しました。

はじめに姫路市家島町のJF坊勢に行き、同JFの事業などを視察しました。同JF森光則参事から、JFの概要や、行われている漁業の内容、資源管理の仕組みなどの話を聞いた後、中間育成場や加工場などを見学しました。中間育成場では、同JFが、活か

して漁獲された小型のアコウを買い取り、育成し放流する取り組みを実践しており、参加者らは担当者に詳しく話を聞くことができ、大変参考になったようでした。また、同JFの大角生馬氏（県漁青連会長）の漁船に乗り込み、瀬戸内海の小型底曳網漁業の操業を見学しました。普段とは違う海と船に、参加者は興味深く見学するとともに、様々な質問をしつつ、交流を深めました。

次に、姫路市白浜町のイオンフードサプライ（株）の集配センターを見学し、県とイオンが行っている水産物の連携の取り組みや水産物の流通について意見を交わしました。担当者からは生ホルイ力をレシビと一緒に売ったところ、昨年度の3倍以上の売り上げを記録したことや、来年度はハタハタで企画するとの話が紹介されるなど、有意義な意見交換となりました。



アコウの入った水槽を見学

翌日、参加者らはイオン大津ショッピングセンターの鮮魚売り場を訪れ、担当者に話を聞きました。ここでは前日訪れた集配センターから届いた大きな魚を販売するサイズに切り分け、刺身を作ったりしているとのこと



イオン店舗を見学しました



西日本の各地に商品を届ける仕組みを学ぶ



JF兵庫漁連 柴田本部長と意見交換

とで、担当者から「消費者が興味を示す水産物は活魚と加工品。特に加工品は人気」といった話を聞くことが出来ました。

視察研修の最後は、姫路市白浜町にあるJF兵庫漁連水産加工センターを訪れ、柴田 昌彦流通加工事業本部長から話を聞き、水産物の加工品の製造工程を見学しました。柴田本部長によると「但馬の魚では、ハタハタとホタルイカを商品化している」とされ、「加工品には単価が安く、加工の時間が掛からず、まとまった量が確保できるものが向く」と話され、参加者は熱心に耳を傾けていました。

干しダコ出来たよ!!

～絶好の干しダコ日和のもと楽しむ～



JF兵庫漁連 SEAT-CLUB



もと、タコをみるところから干すまでの作業を行い、最後に出来た干しダコを前に記念撮影をする姿も見られました。

干しダコづくりのあとは、会館4階の調理実習室でアジの3枚におろし、アジのソテーやタコを使ったサラダづくりを行いました。ここからはシートクラブ 隅谷 翠主任も加わり、参加した親子は次々に料理を作っていました。最後に、用意されたタコ飯、味噌汁、手作りの心太（ところてん）とともに昼食を摂り、夏の楽しいひと時を過ごしてもらえたようでした。

7月24日（水）、JF兵庫漁連（山田隆義会長）のSEAT-CLUB（シートクラブ）は夏休みの親子イベントを水産会館で開催し、干しダコづくりと魚の3枚おろしについて楽しく学びました。

干しダコ作りでは、同会館屋上で行われ、シートクラブ 西本 広幸主任が講師を務めました。当日は天気にも恵まれ、やや風もある絶好の干しダコ日和。参加した16組の親子は、講師らの指導のもと、



隅谷主任の料理教室



干しダコとともに記念撮影

大輪田塾だより

漁業法と宿泊研修(淡路・徳島方面)

7月の大輪田塾は通常講座と宿泊研修が開講されました。

通常講座は9日(火)に「漁業法概要」と題し、県水産課中岸 明彦課長補佐を講師に招き、漁業法や漁業権の成り立ち等について講義を受けました。中岸講師は「漁業法は漁業者を守るための法律。普段から理解しておくことが大事」とされ、法律の考え方や、漁業権行使のあり方など詳しく話をされ、塾生は熱心に耳を傾けていました。

21日(月)・22日(火)には毎年恒例の県外研修を「ブランド化」に焦点を絞り、淡路・徳島方面で行いました。21日はJF福良において「淡路島3年とらぶぐのブランド化について」と題し、同JF 前田 若男組合長のお話を聞くことができました。ハマチ養殖からトラフグ養殖への転換の話から、3年



詳しくお話くださった前田組合長



中岸講師の話に聞き入る塾生のみなさん



偶然見ることができたハモの漁具

の養殖フグにこだわり、試行錯誤しながら現在のブランドを確立するに到った過程やPRの方法などをお話いただいたあと、養殖筏のフグも見せていただきました。3年フグの証明書や全国のフグ養殖業者間で情報を共有する仕組みづくりなど参考になる話は多く、塾生はここまで詳しい内容を聞くのは初めだったようで「PRの方法などの工夫は大変参考になった」と話していました。



福良漁港で記念撮影(このあと更に塾生が合流)

翌日は、場所を徳島県のJF徳島市に移し「徳島活鱧ブランドの取り組みについて」と題し、JF徳島市 麻植 勇組合長、徳島県水産課 佐藤 佳奈主任 主事ほか関係者からハモのブランド化の取り組みについて話を聞きました。全国でも有数のハモの水揚量を誇る徳島県では、ハモをブランド品目として位置づけ、漁業・飲食業・観光業・行政などで「徳島の活鱧ブランド確立対策協議会」を立ち



この選別台は小型のハモをそのまま海に帰す仕組み

上げ、様々な取り組みを行っています。積極的なPRのほか、同JFでは職員による厳しい選別や、活かし方の工夫などを紹介していただきました。浜では工夫を凝らした選別台や活かしている水槽なども見せていただくことができ、塾生は熱心に質問をしたり、写真を撮ったりして理解を深めていました。

最後に、徳島県を代表する企業の一つである大塚製薬(株)の徳島工場を訪れ、生産管理と社員教育について学ぶことが出来る施設を見学しました。生産管

理についてはオロナミンCとポカリスエットの製造工程を見学し、徹底した衛生管理を目的にしました。また、社員教育を行う「能力開発研究所」を訪問し、担当者から、同研究所内の展示物から導かれる発想転換のヒントに繋がる考え方などを聞くことができました。塾生は普段とは違う内容と、新しい考え方に触れることができ、予定時間を超える熱心な見学となりました。

この後の大輪田塾

日時：平成25年8月27日（火）

13時30分から 水産会館にて

講義：「平成25年度 大輪田塾修了

論文発表会」



低い天井に3トンを超す丸太。どうやって乗せるかは、発想の転換が必要

海難事故をなくそう!

ライフジャケットを着用していますか？



モデル：JF兵庫漁連 廣津留 恵さん

夏の暑い時期は、膨張式ライフジャケットが涼しい!!

季節に合わせてライフジャケットを着こなしてはいかがでしょうか

他にもいろいろなタイプのライフジャケットがありますよ

浮力合羽 も好評発売中！
JF兵庫漁連が開発した商品です



よく浮きます!!

ライフジャケット・浮力合羽の購入は
お近くのJFかJF兵庫漁連資材部(078-942-9272)までお問い合わせください

グループリーダー夏期研修会を開催

但馬地区漁協青壮年部連合会



動に期待を寄せられました。

その後、講義が2課題行われました。最初に「冷凍魚の品質向上に向けた取り組み」として県農林水産技術総合センター岡田 佑太研究員から、水産物の冷凍技術とその品質向上に向けた取り組み事例の説明とその効果について講義がありました。

但馬地区漁協青壮年部連合会（山中康正会長）は、豊岡市内のホテルで「平成25年度但馬地区漁青連グループリーダー夏期研修会」を開催し、行政などの関係者も合わせて約40名が参加しました。

まず挨拶を行った山中会長は「景気上昇のニュースがあるが、実感できないのが現状。我々は景気の状態に関わらず、魚食普及等の取り組みを進めていかなければならない」とされ、来賓の県但馬水産事務所 水田章 水産専門技術員は「魚価向上の取り組みは継続し続けなければ結果は出てこない。今後も継続してもらいたい」とし、今後の同漁青連の活

次に「アカガレイの資源生態」として独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 藤原 邦浩氏の講義がありました。



藤原講師の講義風景



冷凍技術について話された岡田講師

ヒトデの駆除に新兵器!?

～神戸市の2JFが駆除実施～

県神戸農林水産振興事務所

7月13日（土）、JF神戸市（山田 隆義組合長）、JF兵庫（糸谷 安一組合長）の底曳網漁船によるヒトデ駆除が行われました。

前回（5月18日実施）拓水6月号 No.680参照）は沖合の通常操業する海域で実施しましたが、今回は沿岸部のヒトデも駆除するため、北海道で使われている「スターモップ」を参考に、ロープを加工して絡め捕るヒトデ駆除用のモップを作成しました。

新たに作ったヒトデ駆除用モップ

実施当日、垂水から兵庫までの底曳網漁船16隻が分担して、沖合と沿岸部を目指して出港し8時から作業を行いました。駆除の方法は、沖合漁場は通常の底曳網で、沿岸部はヒトデ駆除用モップを使って、午後1時まで駆除を行いました。

この日駆除されたヒトデは約1トンで、東須磨漁港に陸揚げ後、垂水漁港に陸送し、焼却処分するため乾燥させました。



この取り組みは今後も続いていきます



大学生が消費者問題を 明るく楽しく学びました

消費者月間の企画として5月18日(土)に、兵庫県と大学生協阪神事業連合の共催



で「ひょうごの消費者市民社会を大学生が創造するワークショップ」が、相楽園会館にて開催され、18大学から132名の大学生が参加しました。

冒頭に、これまで消費者啓発活動等を実践してきた大学生28名に、「くらしのヤングクリエイター活動認定証」が井戸敏三 兵庫県知事より交付されました。

17のグループにわかれてワークショップを実施。消費者市民社会を自分の問題に置き換えながら、グループごとに意見交流をし、消費者市民社会を



実現するための「私の〇〇力」を3つ模造紙に書き出し、グループごとに発表しました。

「同じグループや他のグループの意見を聞くことで、消費者としての自分は何ができるのか、何が必要なのかということを見ることができました」という感想のとおり、参加者の意見を全員で話し合うことにより、消費者問題を

明るく楽しく、かつ真剣に学んだ有意義な内容のワークショップになりました。



兵庫県青協がTPPについて意識調査を実施

兵庫県農協青壮年部協議会(水澤 辰也委員長)は、6月15日(土)、全国農協青年組織協議会のTPPにかかる全国一斉活動の一環として、JA兵庫六甲農産物直売所「パスカルさんだ一番館」において、地域住民を対象にTPPに関する意識調査を実施しました。

調査は、盟友が地域住民とともにTPPについて考えることを目的に100人を対象に実施した。「TPPに賛成ですか、反対ですか」との問いには、約6割が「分からない」と回答。賛成は16%、反対は25%だった。TPPに関する情報開示、説明が不十分であることが浮き彫りになりました。また、「TPPに参加することによって、どのような影響があると思いますか」の問いには、5割が「輸入品の価格低下」をあげる一方で、5割が「食の安全性の低下」をあげ、食生活への影響に不安を感じていることが分かりました。

今回の調査を踏まえ、同協議会では、今後も地域住民とともに地域農業と食について考える活動に取り組むことにしています。



TPPに関する意識調査を実施する兵庫県青協の盟友



旬に想う

写真と文
遊方子

魚はなぜ群れるのか

◆日常生活には「ナゼ」とか「どうして」と考える事が多くある。「海の水はどうして塩辛いか」と子供に聞かれた。海水が辛いのは塩分を含んでいるからで、なぜ塩分を含むのかを説明しなければ回答にならない。そこに棲むサカナに塩辛さが影響しないか。海の魚がなぜ塩辛くないのかと、矢継早に質されてサカナについて、あまり理解してないなど反省しきりだった。海水中の塩分については地球の歴史を考えなければ回答が難しい。膨大な年月により少しずつ地中の塩が海に集積したそうだが、素人には難解すぎる。「死海」は1ℓ中に三百グラム近い塩類を含むとか、湖なのに何故なのか。これも調べが必要だ。

◆魚が塩辛いのは、魚体の細胞に侵入しぬよう、浸透圧の調整が旨く働いている。魚の体液は海水よりも淡いから、通常であれば塩分を取り過ぎて仕舞うことになるが、海水を呑んでも余分な塩分はエラで濾し、腎臓を経て体外へ排出するから何ら影響を受けない。日本人は古代から魚や海藻を食して海とは深い関係にある。こうした魚体のうまい仕組みにより、健康が維持されてきたようである。魚が食べられる暮らしを、今更ながら有り難く思っている。

◆魚がなぜ群れるのか。これを学問的に探求し随分と色んな説が生まれている。魚の行動は、環境変化への本能的なもので、水質・水温・餌の多寡などで動きを起している。須磨海浜水族園。超大型の水槽でイワシの群れを見学できるが、ほぼ同種類で同体長の個体が大きく群れて泳いでいる。一見して右往左往しているようだが、案外に整然とした動きだ。後方にいるイワシも勝手に進むのではなく、前者に遅れまいと懸命に泳いでいる。少しでも群れから外れて一匹になると、たちまちデカイ魚に食われる。弱肉強食の世界が眼近く展開する。大きな群れを作るのは、保身のための究極的な本能といえよう。

◆魚が極寒の海に住めるのは何故か。魚の元気はDHAに守られているという。このDHAは人間にもプラス要素で、非常に健康に役立つ。魚は大切な食料源である。マグロは日本人好みの魚で、大トロ部分が寿司ネタとして最高に人気があるクロマグロは特に好まれる。我々の生活は古代から、魚を栄養源として成り立つともいえる。魚の動きに関する知識が、漁業技術を発達させ、色んな漁法を工夫し開発された。明石の林小学校の庭に「巾着網の発祥地」という石碑がある。先人の苦勞や工夫の後を偲び、魚食できることに感謝するのも意義ありと思う。何故どうしての疑問符の追っかけは、大いに楽しめるのである。

かわいい“うちわ”の展示会

～明石市立播陽幼稚園の園児らが作成～

JF兵庫信漁連

JF兵庫信漁連では、毎年、兵庫県水産会館の1階ロビーにおいて、会館近くの明石市立播陽幼稚園の園児たちの



お行儀よく座って、話を聞く園児たち

“手作りうちわ展”を開催しています。飾られたうちわは、色とりどりの海にタコや魚が泳ぐ姿をモチーフにした絵が描かれており、会館を訪れた人たちの目を楽しませてくれます。

また、7月23日（火）には園児らを招いた見学会が開催されました。JF兵庫漁連 西本 広幸主任からのタコについての説明では、園児たちは自分たちがうちわに描いたタコの話をもっと聞いていました。

今年もたくさんの可愛いうちわをありがとう！



可愛い“うちわ”がいっぱい